

手紙

2006(平成18)年11月3日鑑賞(道頓堀角座)

★★★★



監督＝生野慈朗／原作＝東野圭吾『手紙』（毎日新聞社、文春文庫刊）／出演＝山田孝之／玉山鉄二／沢尻エリカ／吹石一恵／尾上寛之／吹越満／風間杜夫／杉浦直樹（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年日本映画／121分）

……「手紙」という言葉の温かさとは裏腹に、刑務所の検閲印入りの手紙は差別を受ける根源に……。殺人犯の兄を持った弟。そんなレッテルを背負った人間は、一生幸せを求めることも許されないのか？ 直木賞作家東野圭吾の原作を基にそんな重いテーマに真正面から切り込んだ映画だが、ちょっとストーリー構成に難が……。また、そんな問いに対する答えはホントにあるの……。また、必要なの……。私はそう思うのだが、映画が出した一定の結論は……？



あちらは満席！ こちらはガラガラ……

11月3日（祝）の公開初日の午後7時から観た『DEATH NOTE(デスノート) the Last name』は予想どおり満席だったが、同日3時55分から観たこの『手紙』は、これも予想どおりガラガラ……。そりゃ累計1900万部突破のコミック『デスノート』に対して、直木賞作家東野圭吾原作のベストセラー小説といってもこちらは80万部突破という程度だから、20倍以上の開きがあるのだからそれも当然……。？

そのうえ、私たち法律関係者や犯罪被害者のあり方に関心を持っている一部の識者たちを除いては、この映画のテーマはあまりにも難しいし、あまりにも暗くそして重い……。？



『電車男』に続く主演だが……

大ヒットした『電車男』（05年）の電車男は100%キャラでもたせる面白い役柄

だったが、この『手紙』における弟の武島直貴もかなり個性の強い役。そんな直貴役に山田孝之が『電車男』に続いて主演……。そこで私が思ったのは、殺人犯の弟というわりには、直貴の顔立ちや髪形はどことなくお坊っちゃん風で、二枚目色が強すぎるのではないかということ。したがって、やたらと女の子にモテることになるのだが、それは殺人犯の弟でいつも差別を受けている暗い男というこの映画で設定された役柄と、大きく食い違っているのでは……？

他方、兄の武島剛志（玉山鉄二）の方は殺人犯らしい顔立ち（？）で登場するが、その犯行状況を観ていると、逆に彼には殺人犯というレッテルはあまりに似合わないし、もともと弟思いのやさしい性格の持ち主。したがって、兄の方は原作以上に悪者仕立てになっているのでは……？

なぜ白石由美子は直貴に興味を……

直貴は川崎のリサイクル工場で働いているが、いつも野球帽を目深に被って目立たないようにしている物静かな青年。こんな直貴に興味を持ったのが同じ工場で食堂の配膳係をしている白石由美子（沢尻エリカ）。2人はいつも寮から乗る送迎バスで一緒になるのだが、いろいろとモーションをかけていくのが由美子。最初は話しかけるだけだったが、お昼の弁当を渡したり、プレゼントを渡したりとやけに積極的。しかし、なぜ由美子が直貴に惹かれていくのかがサッパリわからない。前述のように、直貴は物静か（暗い？）だが割とハンサムだから、ひょっとしてそこに惹かれただけ……？

しかし、それにしてはかなりしつこいし、直貴から「放っといてくれ！」「俺は殺人犯の弟だ！」と突き放されてもまだ……。なぜこんなかわいい娘がいつまでも直貴に執念を燃やすのが全然明らかにされていないのが、この映画の大きな欠点……？

原作は歌手、映画はお笑い……

私は原作を読んでないが、この映画が原作を大きく変更させたのは直貴の夢を歌手からお笑い芸人にしたこと。パンフレットにある、文芸評論家西上心太氏の「“手紙”が繋ぐ兄弟の絆と“贖罪”の意味」によれば、原作では、連れられてい

ったカラオケボックスで直貴がはじめて人前で歌ったジョン・レノンの『イマジン』を聴き、その場にいた者たちが静まりかえり、これによって直貴は音楽への道に挑戦することになるらしい……。しかし、正直言って私には何となくそれも嘘っぽいと思えるし、この映画のように、中学生の頃から「テラタケ」というお笑いコンビを組んでいる友人の寺尾祐輔（尾上寛之）と共にプロを目指して努力しているというのも全く現実味がないように思えてしまう。だって、工場で働きながら、昼休みに2人で練習しているだけで、ホントに舞台上に立つような芸ができるの、と思ってしまうから……。まあ、最後の泣かせどころに観客を導くための脚本づくりとしては悪くはないと思うのだが……。

一見順風満帆に見えたが……

寮の中で、刑務所の検閲印の入った兄剛志からの手紙を先輩工員の倉田（田中要次）たちに見つかったことがきっかけとなって起こった騒動は、かえって直貴を発奮させ、お笑いでプロを目指す夢に挑戦することになった。プロを目指すお笑い芸人はゴマンといえるはずだから、よほど抜きんでた才能を持っていなければプロデビューすることは難しいと思うのだが、この映画は意外にそこらが安易……？ 寺尾とのコンビ「テラタケ」はすぐにテレビに出演するようになり、刑務所にいる剛志の目にも触れるようになっていった。なお、直貴の行動に触発されて、自分も夢を目指すんだと東京の美容学校に入学した由美子も今は見ちがえるほど美しくなったが、なお直貴一筋のよう……。

さらに、そんな直貴が「運命の出会い」を果たしたのが、気乗りしないまま参加した合コンでの女子大生の中条朝美（吹石一恵）。幼くして母親を亡くした朝美は、幼くして両親を亡くした直貴がよほどしっかり者に見えたのか、直貴に興味を持ち、自分から住所を尋ねてくるほど……。ところが、この朝美は大企業GSコーポレーションの専務令嬢で、父親（風間杜夫）の決めた婚約者までいるという全く身分違いのお嬢サマだった。しかしそんな違いも何のその、朝美はえらく直貴にご執心で、遂に今日はお家にご招待というレベルまでに……。このように直貴の人生は、一見順風満帆のように見えたが……？

🎬 「殺人犯の兄を持つ」弟というレッテルは……？

剛志が刑務所に入ってからずっと直貴につきまとうのが、「殺人犯の兄を持つ」というレッテル。ひどい時はアパートの部屋の入口に「兄は殺人犯！」とペンキで書かれたため、部屋を追い出されたり、殺人犯の兄を持った弟ということが会社にバレるとたちまちクビを宣告されたり、直貴は散々な体験を積んできた。直貴が人間を避け、世間の目から逃れようとしているのはすべてそのためだ。したがって、今お笑い芸人として成功しようとしている直貴は、プロダクションにも兄のことは言っていなかったし、朝美にも「兄弟はいない」とウソの説明をしていた。つまり、直貴が殺人犯の兄を持つ弟であることを知っているのは、相方の寺尾とずっと直貴のことを想っている由美子だけなのだ。しかし、情報化社会の今、そして他人の足を引っ張ることが大好きな人間がゴロゴロしている今、そんなウソがいつまでも通用するはずがない。すなわち、「インターネット」という現代的兵器によってそのウソはたちまち破綻することに……。

🎬 直貴は被害者？ それが映画と原作の核心だが……

出生や身分を偽る人間は数多いが、それにはさまざまな動機がある。すなわち、古くは島崎藤村の有名な小説『破戒』で描かれる部落差別を免れるためというものから、最近(?)は某国会議員の経歴詐称問題までいろいろ……？ 積極的に尾ひれをつけて自分を良く見せようとする経歴詐称は「何とセコイ！」と思うだけだが、マイナス情報を隠そうとしたり、少なくともそれを自分から説明しないのは、人間なら誰でも同じ。したがって、直貴が殺人犯の兄を持つ弟という事実をできる限り隠そうとしたのは当然……。

そんな体験を何度も経験する中で、次第に社会の片隅でひっそりと生きていく習慣が身についていた直貴は、自分は差別されていると感じ、自分はその被害者だと信じ込んでいた。それはそれで仕方がないだろう。しかし、その考え方を180度転換させる重大な役割を果たしたのが、直貴がコンビを解散した後就職した秋葉原の家電量販店の会長平野(杉浦直樹)。直貴は朝美との別れのショックも受けとめながら店頭で一生懸命働いていたが、ある日突然別の部署への配置転

換を……。つまり、いきなりの左遷だ。その原因は……。それは言わなくても直貴にはわかっているもの……。

そんな直貴に対して静かに会長が語る言葉は、犯罪を犯した者の家族が差別を受けるのは当然であり、犯罪者はその差別も背負わなければならないということ、そして差別のない場所を探してはダメ、あくまでこの職場で生きていくんだということ。この言葉の意味をどう捉えるか、それがこの映画の、そして東野圭吾の原作の核心だが……。

剛志はなぜ毎月手紙を……？

この映画はそのタイトルにふさわしく、手紙の文面が再三ナレーションで流される。またパンフレットの中には、便箋に書かれた兄剛志のたどたどしい字の手紙が何通か掲載されている。そしてそれには刑務所の検閲印が入っている。直貴に宛てた手紙を読めば、剛志は直貴に手紙を書き、直貴からの返事を読むのを最大の楽しみとしていることがよくわかる。それはそれで当然のことだろう。さらに物語の終盤になると、剛志は被害者の遺族である緒方忠夫（吹越満）にも毎月1度欠かさず手紙を出していたこともわかってくる。この被害者への手紙は一体何のために書いていたのか？ それもこの映画の大きなテーマの1つ……。

「手紙」あれこれ

私は中学2年生の時、ある親友が松山から大阪へ転校したため、以降文通を続けることになった。しかし、当時の私は多分まだ十分成熟していなかったのだろう。自分の考えを手紙に書いて表現することがなかなかできず、苦勞したことをよく覚えている。それが大きく変わったのが、大学に入り学生運動に飛び込んでから。以降書くこと、表現することが私の大きな楽しみとなった。そんな大学時代にはやったのが、由紀さおりが歌った『手紙』という曲。「死んでもあなたと暮したいと……」で始まるアップテンポな曲は当時大ヒットしたが、それはやはり『手紙』という表現手段、通信手段そのものにそれぞれの人間が何らかの思い入れがあったせい。つまり、手紙は今ドキのメールとは明らかに意味や重みが違っているわけだ。もっともこの映画の中には、兄からくる手紙が不幸の根源

だと判断した直貴が、住所変更を知らせる手紙も出さず、刑務所内の兄と「没交渉」にする直貴の姿が描かれる。そこで面白いのは、何と由美子がそんな直貴に代わってワープロで打った手紙を剛志に返していたこと。剛志は文字からワープロに変わった理由をホントに疑わなかったのか、という小手先の問題は別として、由美子がなぜそんなことをしたのか、はこの映画の大きなテーマ。そしてこれは、由美子にとって直貴は、逆に直貴にとって由美子はどんな存在なのかを考えるについて大きなヒントになる行動。やっぱり直貴にとっては、大企業の専務令嬢の朝美からあっけなく振られ、由美子との結婚を選んだのがベストチョイス……。

差別の連鎖の描き方は……？

映画の終盤に至り、直貴を取り巻く状況はガラリと変わる。今、直貴は由美子と結婚して社宅に住み、一人娘にも恵まれ、ささやかながら幸せな生活を営んでいる。仕事も順調、家庭も円満で言うことなし。しかし……。うわさ話は残酷なものほど面白いから、社員の非行や浮気、不倫に関するうわさ話などは、社宅の中では急速に広がるもの……？

ある夜、やさしく娘を寝かしつけていた直貴が娘から聞いたのは、「ねえ、パパ。人殺してナニ……？」という驚くべき言葉。殺人犯の弟夫婦が社宅に住んでいるらしいといううわさ話が広がってからは、直貴が会社に出かけている間、同僚の奥さんや子供たちと一緒に公園で遊ぼうとしても、由美子とその娘だけは仲間外れにされることに……。日本社会ではこんな差別の連鎖が現実にあることははっきりしているが、これに対する由美子の対応は……？ そして、この映画の結末のつけ方は……？

兄弟の絆と手紙という鎖は……？

パンフレットの中で直木賞作家東野圭吾は、加害者の家族に焦点を当てて『手紙』を書き続けたが、いじめにあい続けた主人公がどんな答えを出すのか、自分でもわからないまま筆を進め、「だが結局、小説の中では明確な答えを示すことができなかった。書き終えた時に気づいたことは、これは答えのない問題なのだという事だった」と書いている。たしかに、前述の、直貴に対して会長が語っ

た言葉には1つの真実があり、加害者本人である剛志や加害者の弟である直貴が生きていくうえでの大きなヒントが含まれているが、今も社宅内で差別を受け続ける直貴が、妻や子供を守るために剛志との文通を断つという答えを出すのが当然か否かは必ずしも明確ではない、と私は思う。

ところがこの映画は、今後剛志との手紙による接触を一切断つという直貴の答えを用意し、それを綴った直貴の最後の手紙にかなりのウエイトを置いている。しかし、これには賛否両論があるはず……。東野圭吾はパンフレットの中では続けて、「この映画の出来は見事だ。原作をととても尊重してもらったと思う」と書いているが、私の推測ではこれはおべんちゃら……。ホントはその答えは玉虫色にしてほしかったのでは……？

観客の涙を誘うツボはさすが……

ある日、直貴はコンビ解消後1人で頑張っている親友寺尾の訪問を受けた。そこで寺尾が言うのは、「久しぶりにコンビを組み、刑務所の慰問に行きたい」ということ。この映画ではサブ的な扱いだが、直貴と寺尾の男同士の友情はお見事で、誰しもかくありたいと思う理想型……。それはともかく、そんな提案を受けて実現したのが、剛志が服役している千葉の刑務所への慰問。何年もやっていない漫才（コント？）をちょっとしたネタ合わせだけで自由にやれるのは、ヤスキヨコンビや阪神・巨人のコンビくらいでなければ無理だと思うが、それはともかく、坊主頭の男たちばかりが観客席に並ぶ舞台で、2人が笑いをとるのは至難のワザ……。そんなプレッシャーの中2人が選んだネタは、出来の悪い兄貴の話。「ウチの兄貴はバカでさあ、例えば……」とボケていく直貴だが、その心の中は涙でいっぱい。またそれは、これに合わせて突っ込んでいく相方の寺尾も同じ。そして、やっとな大きな声をあげて笑い始めた服役囚たちに混じって、唯一人嗚咽しているのは……？

物語のつくり方その他についていろいろケチはつけたものの、この観客の涙を誘うツボはさすが。ガラガラの観客席の中でも、すぐ右手のおばさんからは嗚咽の音が……。

2006（平成18）年11月7日記